私の子供の繪

―兒童畫發達の實際研究―

東京女子高等師範學校助教授　山形寛

一　はしがき

小學校に於ける圖畫教育の建設をするには、どうしても學齡以前に於ける幼兒の圖畫的表現生活の實際を研究せねばならん。兒童が尋常一年に初めて入學して來た時に、既に彼等は一角の描寫生活をして來て居る。一度も描寫したことの經驗のないものは一人も無い。之等の事實を無視し彼等の經驗を基礎としないで圖畫教育し方法を建設しやうとすることは實に心なき業と云はねばならん。かう云ふ事は又幼稚園に於ける圖畫に就ても云ひ得ると思ふ。幼稚園にはいつてくる迄にも既に彼等は相當の描寫生活を營んで來て居る。故に幼稚園の教育に於ても彼等の描寫が如何なる心理的の過程を經て來るものであるか、如何なる過程を取つて筋肉運動の統制が行はれて來るものであるか等に關する觀察研究をすることは極めて重要なる事に屬するものである。以上の如き研究はこれ迄にも多くの心理學者や實際教育を擔當する者によつて成されて來たことではあるが然しまだ甚だ不充分であると云はねばならん。而してその研究の報告されたものに就て見ても多くは抽象論に終つて居て、ほんたうにその過程を詳細に記錄したものはない。實際家が參考としやうとするにはそんな抽象論は殆ど役に立たぬものである。吾々の要求する處は一人一人の子供に就いて極めて詳細にその發達過程を記錄したものでなければあまり參考にならない。而してかう云ふ材料が單に一人

や二人のみでは總てを推す材料にはならないけれども、こんなものが數多く出來れば、必ずやそこに子供の發達過程には色々な型がありそれ等が如何なる發展の徑路をとるものであるかと云ふことに就て的確なる指針を得ることが出來やうと思ふ。私は切に幼稚園の先生方にかう云ふ詳細なる研究記錄の發表あらんことを望むものである。

そこで私は如上の意味に於て先づ手近に居る私の小供に就いて彼等の描寫生活を觀察しその材料も多少集めて居る。然しそれは只雜然と集めただけで未だいささかの整理もやつて居なければ記錄等もぬけ勝ちになつて甚だ不完全なものであるから、まとめを發表するの運びにはいたつてゐなく又初めから發表すると云ふ風な計畫を立てて居つたのではないから述べる所はやはり抽象的なものとなつて了つて參考にはならないかと思ふが只同志の方を得てこの研究を完成して行きたい希望からこの稿をかいたのである。

二　描寫は何時頃から始めたか

私には二人の子供があつて長女が數へ年六歳次女が三歳であるが、彼等が何時頃から描寫を初めたかに就ては長女の時と次女の時とで餘程異つて居る。それは長女の時はとばで描寫をして居るものも無かつたし又私も積極的に描寫の機會を與へることをしなかつたために約四ヶ月位長女の方が遲く描寫を初め滿二歳頃であつたが次女の方はそばに姉のかいて居るのを見て模倣もしたし又私も材料を與へて描寫の機會を早く與へたためか滿一歳八ヶ月頃（今から一ヶ月前）からであつた。然し之は凡の所を示したもので、ほんたうは何時から初めたかは頗る不明瞭であつて、インク瓶をひつくりかへしてそのインクを指の先きにつけてそこいら一面に塗たくりまはしたり、火鉢にあつた木炭の屑を捨つてそこいらに塗つたりした事は今少し早くから始まつて居つたやうであるが先づ描寫と名のつけられさうなのは前記の時期位からである。然しどの程度のものからを描寫と云ふかは解釋の仕樣によつて異なると思ふから前記の時期は嚴密ではないのである。

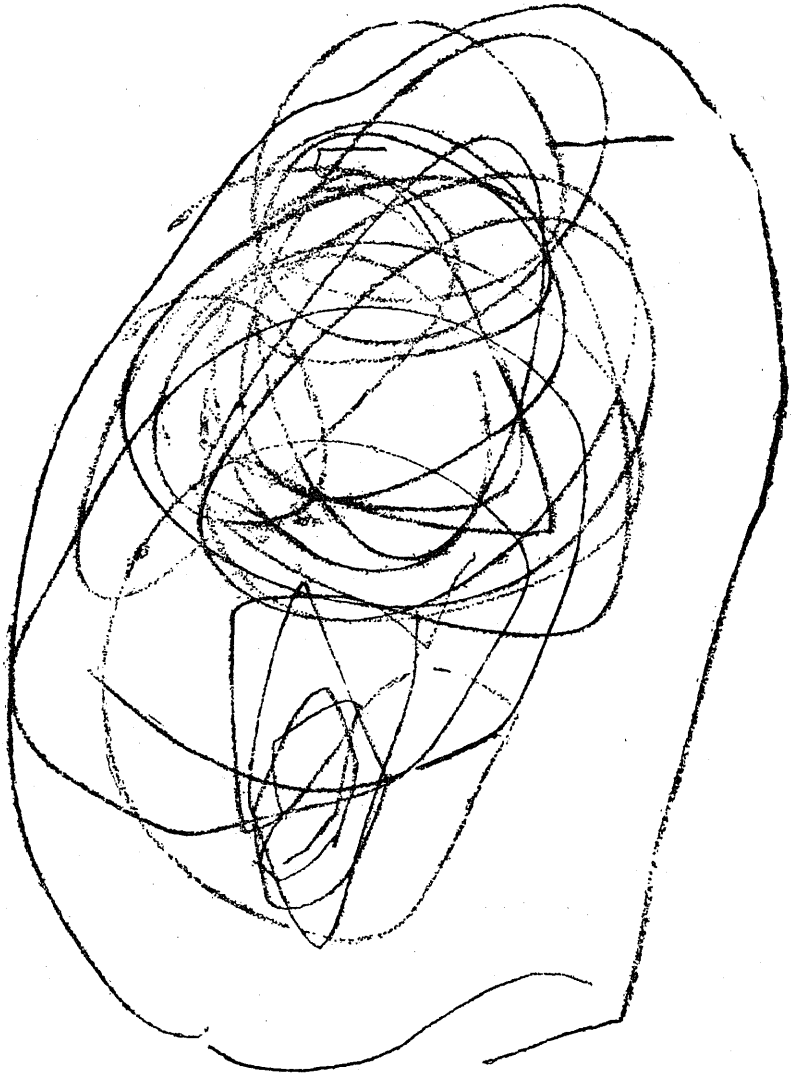
此の滿二歳前後に於ける最初の描寫の特質とも云ふべきは、只塗ることそれ自身に興味があつてするのみで無意味

な漫筆に過ぎない。恰もやつと歩行の出來るやうになつた幼兒が何の意味もなく（子供自身には何等かの意味を含んで居るのかもしれんが）只室内をあちらに行つたり、こちらに行つたりして、歩るくことそれ自身に興味がありそれ自身が生活であるが如く、只畫くことそれ自身に興味がありそれ自身が生活であるのである。そして紙の上に畫くのも疊の上に畫くのも壁にかくのも同じ意味で、畫かけるものならば品物を選ばないやうである。ずい分疊の上にクレイヨンをぬたくりまはされて閉口したり大切な書物の上に畫かれて閉口したりすることがあるが子供は一向平氣で何にでもかきそしてまだ紙にかきたいと云ふ樣な要求もないやうである。そして又紙にかせても必ずしも紙の中に納まる樣には書かず紙の外までも塗つて平氣で居る。之は紙の中に納めやうとしても筋肉運動の統制が出來ないためにはみ出すのか、又納めやうとする意志がないのかさへも初めの中は不明である。

斯かる漫筆を算することを彼等が發見してからは、鉛筆かクレイヨンかを與へ紙を與へれば、よく厭きないものだと思ふ程盛んにかき時には十分も二十分も休まずに續けて居ることすらある。私は之は安價でよい玩具が出來たと思つて彼が他の遊びにあきた時には紙と鉛筆とを與へることにした。そして一ケ月もたてば餘程上達して兎に角紙の外へはあまりはみ出さぬやうになつた。然し相變らず疊の上にでも壁にでも平氣でかくことは元の通りである。上述の如く描寫することは非常に喜んでやるけれども材料を何も與へて置かない時に彼が積極的に材料を要求するやうになるのはもつと先へ行つてからである。次女は今丁度かう云ふ時期にあるのである。そこで私は思ふ斯かる時期に於てなるべく多くの材料を小供の周圍に提供して、彼等をして思ふさま描かせると云ふことは彼等の生活内容　實の一方面をなすものであるから父たり母たるものは材料を潤澤に供給して、その機會を與へることに努めなければならんのである。

三　滿三年前後に於ける描寫

これから後は長女のみに就ての記錄であるが、滿二年頃



「顔」二年八ケ月頃ノ作(上方ニアルニ本ノ横線ハ眼下ノグルグルヰ畫イタノハ口)

から初めた彼の漫筆は、二年四ヶ月頃からそれに漸次意味づけられる樣になつた。その現はされたるものは相變らず形を成さないものなるにかかはらず之は何であるとかあれは何んであるとか自分だけではそれに意味をつけて畫くやうになつたこんな狀態は可なり長く續いた。然しその畫かれた漫筆に意味づけると云ふことも。ほんたうに或る物を畫かうとして、技巧が拙なため、或は表現法を知らないために、出來たものが、漫筆樣のものになるのか、或は只ぐぢや〳〵畫いたものに、よい[illegible]な名稱をつけるのか甚だ不明である。その頃に「お父さんを畫いてごらんなさい」など云つた場合に線を一二本引いただけで「之がお父さんだよ」など云つたり、又始めに之は何々であるなど云つて居つたものを指して「之がお父さんだよ」など云つたりして、お父さんをかくとか山をかくとか花をかくとか口では云つて居るけれどほんたうには何々を畫くと云ふことの意味が解つて居なかつた樣である。

以上の樣な狀態にあつたものが滿三歲頃になつた時には、何々を畫かうと云ふ意志で描寫をするやうになつた。

そして確に何々を畫くと云ふ意味が解つて來て私が見ても凡それらしい形を表現し得る樣になつた最初の物は階段である。此頃丁度階段に獨りで自由に上つたり下りたりすることが出來るやうになり、それが面白くて獨りでよく上つたり下りたりして遊んで居つたものであるが、その印象が深かつたと見え、長い線を二本併べて畫き、その線と線との間に短い何本もの線をかいて「之はだん〳〵よ」と云つて得意になつて示したものである。然し初めは階段だけは大方それらしいものが畫けたにかかはらず其他のものは相變らずの漫筆であつた。其頃又彼は便所へ一人で行くやうになつた。そして便所と云ふものは二つの物がならんで居つてそれをまたぐものであるとの觀念が强かつたと見えて何んでも二つ對立して居るものが畫いてあるものを見ては「之はお便所」など云つて居つたものである。その頃私が海の中に二つの島が對立して居る繪を畫いて來た時に「ここはお便所」と云つて笑はせられたことがある。かう云ふことが又彼の描寫の上に現はれた、圓を二つ併べて畫いたり、線を二本併べて畫いたりして之はお便所であると云つ

た。こんな風にして漸次その印象の深かつたものからその觀念を發表する樣になつた、然し無意味な漫筆はやはりその間に多く行はれて居つた、何をかくと云ふ意志もなく只ぐる〳〵ぬたくりまはすだけのことでも餘程面白いと見える。

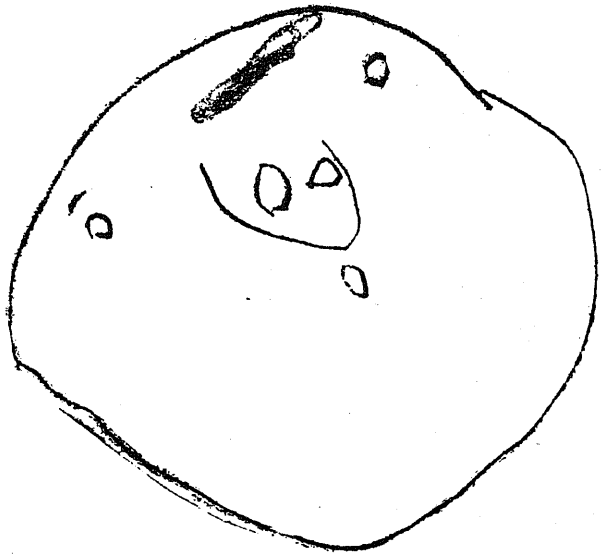
滿三年になる前後から多くの繪本も彼に與へた。之を見ることも大變喜こんでやつた。然しまだ少しも繪本を模寫しやうとする樣なことはしない。

四　滿四年前後に於げる描寫

此頃になつても、やはり相變らずの漫筆は止めない。然しだん〳〵それらしい形のものを畫くやうにはなつて來た。そして此頃から彼の遊び全體の上にも、畫くことにも餘程リズムのあることが明瞭に認められるやうになつた、そしてどうかすると一ケ月位少しも描寫しやうとしない樣なこともある。その時には何か他に非常に興味をひく遊びがある時である。或る時なごは鋏で紙を切ることばかりを一ケ月餘りも續けたこともある。或る時なごは鉢植の草花を出したり入れたり、水をやつたり、いぢつたりすることに興味を引いて數週間も續けたこともあると云ふ樣に遊ぶ事柄に對するリズムが明瞭は認められる樣になつた。又同じく描寫をするにしても、描寫する事柄にリズムがある。或時は人ばかりかいたり、木ばかり畫いたり電燈ばかり畫いたりと云ふ樣に一種のリズムがあることを認められる。

此頃彼の畫いた繪の中に妹を畫たものが數多くある。それ等は皆同じ形式のもので、どれもこれも無雜作に丸をかいた中に眼、鼻、口と認むべきものが凡その位置に畫いてあり、そして必ず顏の左右の兩瑞に縱にまつ黑く非常にこく塗りつぶした所がある。私はその繪を見てそれが何の意味か解らなかつたから「之は何か」と聞いて見たそしたら彼は之は耳だと言つた、然し私はなぜ耳をこんな風にかくのかと云ふことに就て非常に不思議に思つて居つた、そして其後彼が又同じものを畫くのを見た時に始めてそれが何であるかが解つた、それはかうなんである。彼は顏をかく時に前に云つた如く丸をかき眼、鼻、口、をかきそして丸の左右に耳の形を不完全ではあるが畫きそへる。然る後にそ

「お父さん」滿四年頃ノ作



の畫いた耳の上を更にまつ黑く塗つりぶすのである。そこで私は又「なぜ耳をけすのか」と聞いた時に彼は、「耳の上に髪の毛がたれて見えない樣になつて居るでせう」と答へた。成る程妹の耳はおかつぱさんに下げた毛のために大部分かくれて居るのであつた。私は之を聞いてはつと思つた。子供の繪を見て之はちがつて居るの、變であるのなどこうつかり云へないことを今更の如く感ぜしめられた。彼にとつては耳の上に毛がたれてかくれて居るのだと云ふ思想が充分に表現出來て居るのである。耳を一度畫いてからその上を塗りつぶす所に非常に面白い意味が含まれて居ると思ふ。之は單に一例に過ぎないが、子供の繪を觀察して居る時には非常に多くかゝる事實を發見することが出來るのである。

又滿四年前後に彼が畫いた人の顏の繪が澤山あるが、何れも眼鼻口等を顏の上の方に畫いてある。そして鼻には必ず二個の孔を大きく畫いてあつて下から見上げた感じの出て居るものが多いが、之は子供は丈がひくいから大人の顏を見る時には常に見上げて居る譯であるから、そのために斯くの如く畫くのであるかもしれん。然し之は前述のやうな理由でそうするのか、或は技工の拙なためにさうなるのかは不明であるけれども鼻の孔に注意をして居る所などは

「妹」滿五年頃ノ作

確に見上げて居る爲だらうと思ふ。

五　滿五年頃に於ける描寫

四年五ヶ月頃から彼の表現の形式が非常に度々變化し且つ進歩の跡の比較的いちじゆるしいものあるを認める。今迄人を畫くに單に顏だけを畫いて居つたものが首や胴をつけたり四肢をつけたりする樣になつた。然し不思議な事には、よく之迄の書物や何かに子供の表現形式として顏から直ちに手脚の出て居るやうなものを載せてあつたが私の子供は手脚よりも胴の方を先きに畫いた、而して手脚を畫くやうになつたのは滿五年になつた時頃からである。

色彩に關して彼が多少の注意をし

出したのは滿五年前後からである。それ以前に於ても黑色のクレイヨンよりも色のクレイヨンで畫く方を喜んでは居つたが、然しその色は決して色として使つては居なかつた、然るに彼が丁度滿五年になつた今年の五月に、紙の下端を黑いクレイヨンで端から端まで塗り、紙の上端に赤と青と綠とのクレイヨンを互に交錯させ乍ら塗つてあるもの畫いた。そして彼は上方の色を指して「之は夕やけこやけ」と云ひ、下方の黑色を指して「みち」だと云つて居つた。又彼は紙の下方を左右の端から端まで塗つてみちを表はしそれに直角にやはり黑いクレイヨンで樹木をかき數本の枝を畫き枝の先きに綠のクレイヨンでごちや〳〵と葉をつけて置くものを畫いりしたた。之等は確に自然の色彩と云ふものに注意しはじめた證據である。然し自然の色らしきものをにほはせたのは、單にそれ等の數葉に止まり、まだ他の多くは一色でかいて居る。

滿四年頃迄は彼は紙やクレイヨンを自ら要求する場合は少なかつたが此頃はしきりにそれを要求する樣になつた。此頃でも彼に繪本を多少與へて置き、之を見ることを樂しむけれどまだその影響らしいものは現はれてゐない、見ると云ふ生活と、畫くと云ふ生活とはまだ別々のやうである。そして私はなるべく繪本からの影響を受けさせたくないと思つてゐる、自然から得た印象、自然から得た觀念を發表する樣になれかしと思つてゐる。

六　餘　言

以上述べた所は、ほんの飛び飛びに、彼の描寫生活の一端を擧げたに過ぎないから、これだけでは何を書いたのか譯の解らないものになつたかもしれんが、之れを通觀するに、出生より滿二年頃迄は描寫と認むべきやうなことは殆ごしない時期であり。滿二年頃から滿四年半頃までは描寫生活の入門で、その間に於ても前後によつて非常な差異はあるけれども大體一時期と見ることが出來る。四年半頃から五年一ヶ月になる今日までは一變轉期に望んで居るやうに見える。（大正十二年六月十日記）